

鎌倉時代の禪宗諸派と密教

大 屋 徳 城

第壹章 總 說

山谷の雪は「時」の光と熱とに融け、流れて人間に出づれば、溶々として新しき路を開く。而も其の未だ谿壑の間に在るや、本の雪のみ。末の露のみ。焉んぞ他日の壯觀を知らんや。吾人精神的文化の歷程に於いて特に此の感を深うす。

飛鳥流域と寧樂とは日本文化の淵源也。天台四明と高野、東寺とは日本宗教の母胎也。特に叡山が慈覺、智證の包容を経て、十三の巨流思想界に瀰漫するや、あらゆる思想は三塔に該攝せられ、其の統制力を失ふや、あらゆる新しき思潮は亦此處より出でたり。譬へば山中の湖水の如く、凡ての水氣を瀦溜し、淨化して、八方に之れを放出せり。禪も之れ也。念佛も之れ也、日蓮も之れ也。かくて、鎌倉時代に於ける新しき光は大比叡、小比叡の森より出でぬ。

舊きものより新しきものが如何にして生れしか。何故に生れしか。此れ吾人が過去數年間に向つて、聊か努力せし研究なりし也。概して言へば、前者は主として歴史にして、後者は主として教理

なるべし。而も此に尙閑却すべからざるは、謂はゆる新しきものの中に、古きものが如何なる程度に於いて殘存するか。若しくは、如何に調和せられて存在するかといふこと也。吾人聊か此の點にも注意し、鎌倉時代の新佛敎たる禪宗諸派が、其の搖籃たりし台、東の兩密に關する事實上並に思想上の交渉を研究せんと企てたり。此の一小論文は這般の問題に對して、幾分の光明を投すべきものと信ず。

鎌倉時代の禪宗(特に臨濟)は觀方によりては、種々に分類せらるべけれど、特に思想上の立場より大に別ちて、二と爲すを得ん。其の一は籍を台東兩密に置きし人々が、或は入唐し、或は夫れ等入唐歸朝の人たちに附いて傳法せし人々をいひ、其の二は宋元の歸化僧に依りて傳へられ、若しくは夫れに嗣法し、若しくは夫れ等と系統を同じうする人々をいふ也。然る中にも、前者は主として、築西、辯圓、覺心の一流を指し、後者は主として道隆、祖元の一流を指す。若し鎌倉時代の寺院にして之れを分たば、前者は主として、建仁、東福、(詳には筑前博多聖福寺、同承天寺、上州世良田長樂寺、紀州由良西方寺、同高野山金剛三昧院、相州鎌倉壽福寺等)之れに屬し、後者は建長、圓覺(後には、下野那須雲巖寺、京都天龍、相國、等持等杖擧に違あらず)之れに屬す。

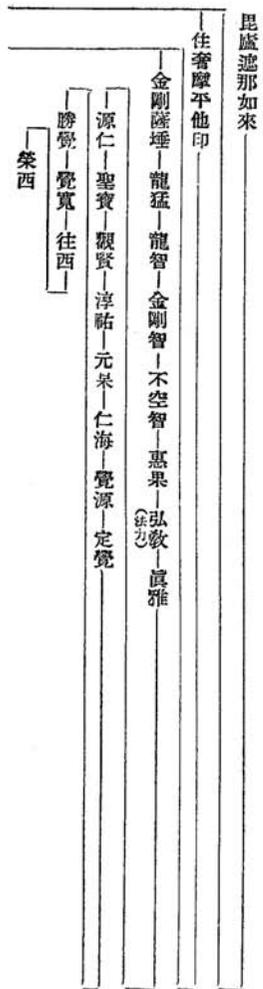
築西、辯圓、覺心の一流は台東兩密との關係尤も深く、其の思想上の交渉尤も密也。此れ等の新しき人々の心の故郷を探り、其の思想成熟の後にも、儼として存在せし兩密の思想は、謂はゆる故

郷忘じがたきものにして、鎌倉時代の思想界に於いて、過渡期を爲せるものとして、不盡の興味なくんはあらず。

今先づ、此れ等の人々が謂はゆる舊佛教たる台東兩密に如何なる系統に於いて交渉を有せしかを研究し、更に進んで、箇々の思想の内容に立入りて、聊か解説を試みんとす。

密教は傳法を重んずること、禪宗に等しく、謂はゆる血脈相承といふことは、尤もやかましくいふところ也。從て、血脈を類聚したる典籍も亦甚だ多く、其の取捨選擇に惑はしむる程也。而も古來寫傳の間、誤寫、誤謬の混入も多かるべく思はる。仍て此に尤も正確なる史料と思はるゝ京都東福寺所藏の辯圓(聖一國師)の血脈に依りて、右一派の血脈を摘録して、其の思想の系統を大觀すべし。

○東寺天台大血脈圖



金剛手菩薩—達磨掬多—善無畏三藏

金剛智—義林—順曉—傳教—廣智—德圓—智證—遍昭
慈覺—安惠—長意

安然—寂圓—玄靜—法三大皇—寬昭

玄昭—玄鑿—實性—覺忍—清禪—延殷

長緯—續蕭—慶有—盛慶—師資相承盛—良海—禪圓
源二作ル

長宴—良祐

遍圓—長教—定慶—源退—延懷—增覺—基好

取殿—相實—靜然

榮西—師資相承ニハ此次ニ嚴琳ヲ載セタリ

玄超—惠果—法潤—法全

智證

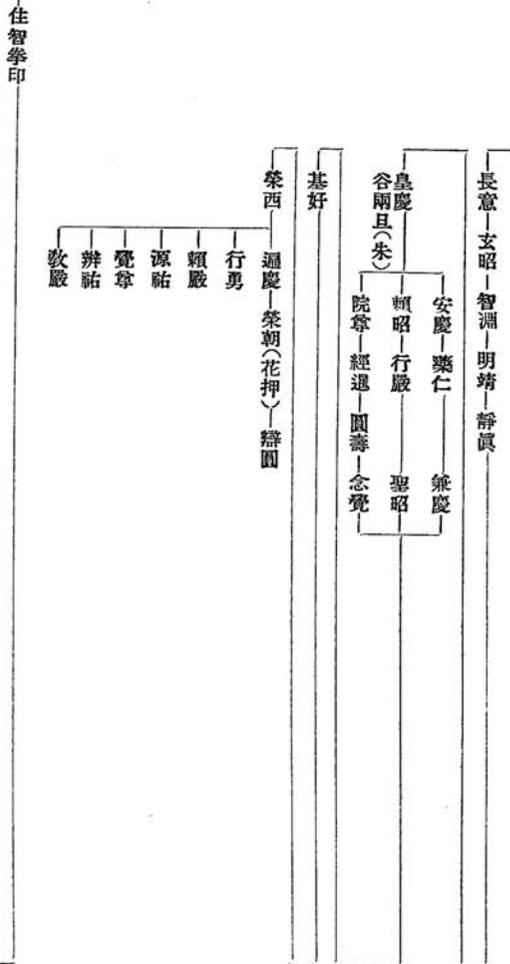
安惠—通昭—取圓—玄昭—玄鑿—實性—覺忍—慈惠

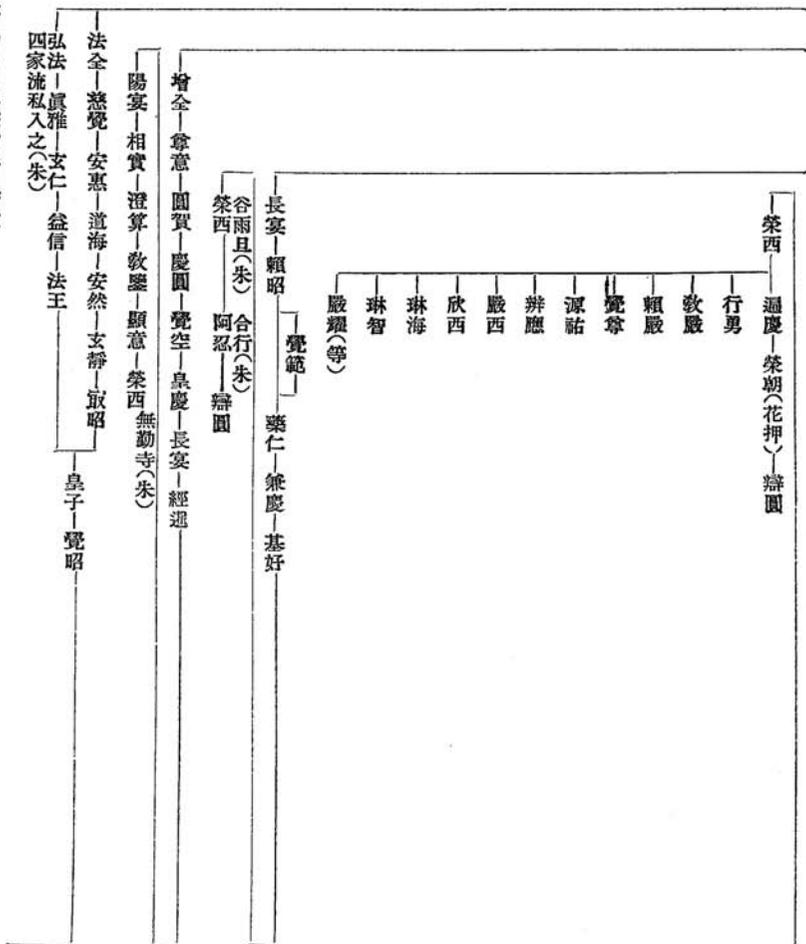
慈覺

清禪—延殷—善秀—日圓—密眞—兼慶—教鑿—慈忍—慶有—覺超—嚴範—經述—念覺

顯意—基好—榮西—榮朝(花押)—師資相承ニ榮朝ヲ明全ニ作ル—辯圓

鎌倉時代の禪宗諸派と密教





第二章 榮西及び其の門葉と密教

榮西の撰述に就いては「日本禪林撰述書目」に十部を列す。左の如し。

興禪護國論 三部經開題 菩提心論口訣 師子淨敵論

法華入真言門訣 出家大綱 一代經論總釋 圓頓一心戒和解

喫茶養生記 眞禪融心義

「長西錄」上には、左の一部を出たり。

出纏大綱一卷 度宋巡禮沙門
智金剛榮西記

「扶桑禪林書目」には左の三部を出せり。

興禪護國論 明庵諱榮西入宋嗣法虛菴懷徹 三卷

三部經開題 同 人 一卷

經論總釋 同 人 一卷

「黃龍十世錄」に依れば五部あり。云く。

生平著述、興禪護國論三卷、一代經論總釋、日本佛法中興願文、不二法門、三部經開題等各一卷、密部甚多不盡記。

「天台霞標」三篇には、左の四篇の文を收む。

鎌倉時代の禪宗諸派と密教

教時義勘文序

同書謝誓文

日本佛法中與願文

眞禪融心義序

其の他、種々後世の書に出でたるもあれど、要するに、右にて大體を盡せり。就中「護國論」は主著とも稱すべきものなるが、元祿六年「禪藉志」出でて之れを疑ひしより、今に學者眞僞に就いて論あり。「禪藉志」下拾遺部に云く。

與禪護國論 卷數四冊建仁開祖明菴榮西千光國師之所撰、余曾讀護國論、文章太拙、理趣不深、蓋後人僞作誣名國師

と、然るに長母寺無住の「沙石集」十、建仁寺本願僧正事には、

與禪護國論トイフ文ヲ作給ヘリ。

とあり。又師鍊の「紙衣贍」には「師子淨敵論」「與禪護國論」の二部を出し、大鑑禪師清拙正澄の千光法師には、

製與禪護國之論、藥滯相小乘之病上下略

の二句あり。要之、榮西「與禪護國論」を製せしは、事實なるも、現存の同名の書が果して夫れなりや否やは研究の餘地ありと謂ふべし。而も該書は直接密教に關せざるを以て、本論文には詳には論及せず。

偕然らば、密部に關する撰述は如何なるものありやといふに、前述の書目中、眞禪融心義を除き

て、(此書のごとは後に論ず)、左の二部ありとすべし。

(一) 菩提心論口訣 (又は決に作る)

(二) 法華入真言門訣 (同上)

菩提心論口訣は文治二年七月高野山傳法院高覺房の請に依り、閏七月二日夜瑞夢を感じて、同十二年引文、同三年正月一日艸了したるもの也。口訣の奥書に云く。

文治二年丙午七月三日高野山傳法院入寺

——覺範高覺房

頻依請口訣、同閏七月一日竊以祈請、同

二日夜丑時、夢云、予空於廣大殿中、向東而坐、予聞地下如狸有走物、伺見金銅普賢乘金銅象、泥往後空待請了、御足、懷取象前足、握溫傍美麗女人見知覺有足披、予云、生身普賢云乍懷、宋人手得種々珍寶、見覺了、可知契佛意矣。

同十二月日引文、同三年正月一日無言念佛次艸了、後時不可改艸矣、榮西記。

下略

「法華入真言門訣」は治承二年十月十五日筑前今津誓願寺にて艸したるもの、奥書に云く。

治承二年戊戌十月十五日、於鎮西筑前州今津誓願寺僧房無言念佛之次記之、金剛佛子榮西

治承三年四月榮西第二回入宋の途に上る。而して始めて禪宗を傳ふ。右二書は入禪の前、台密時

代の作なることは特に注意すべきこと也。

其の他密部の撰あること、諸書に散見すれば左に之を録すべし。

(三) 地藏の決

〔沙石集〕二、地藏之建仁寺ノ本願僧正ノ口傳ニ地藏ノ決トテ一卷ノ祕書アリ、其中ノ肝心ニ、地

藏ハ大日ノ柔軟ノ方便ノ至極、不動ハ剛強方便ノ至極ト云リ。略上

〔雜誌集〕六、地故建仁寺ノ本願ノ口決ニ地不決ト云書有之、地藏ト不動トノ方便、ハナレテ不可

出離。略下

「地藏の決」「地不決」別書なりや同書異名なりや知り難きも、恐くは異名同書なるべし。

(四)灌頂式

〔菩提心論口決〕奥書後部

于時榮西入唐畢、於大唐尋師於諸方、無有其人、唯所興禪宗也、又唐禪師問祕教義理、榮西隨

問答之、禪師隨喜可受灌頂法云々、仍榮西製灌頂式、授唐禪師云々其日僧上下正委記在之略

之れ後人の追記と雖も、亦一種の傳説と見る可し。外に「喫茶養生記」あり。其の中亦密教思想あり。

り。後章に論及すべし。

次に、榮西が密教密法に關する事蹟を討ねて、更に傳燈に及び、其の思想の淵源を窮めて、然る後、末流に及ぶべし。今建久二年七月第二回の入宋歸朝以後を主として、論せんとす。何となれば傳禪以前は純然たる台密の僧なれば、密教密法に關する行蹟ありとて、固より當然の事に屬し、思想上注目するに價せざれば也。

(一) 正治元年九月賴家の爲に不動尊を供養す。

〔吾妻鏡〕 十六二十六日 卯乙 於幕府被供養不動尊一體、導師葉上房律師榮西、布施被物五重裏物五馬一疋也。

(二) 正治二年正月賴家、榮西を請して賴朝の一週忌法要を修す。

〔吾妻鏡〕 十六十三日 庚子 晴々迎故幕下將軍周闕御忌景、於彼法華堂被佛事、北條以下諸大名群參成市、佛繪像釋迦三尊一鋪阿字一鋪 御臺所以御除髮被奉繼之 經金字法華經六部摺寫五部大乘經、導師葉上房律師榮西、請僧十二口 略下

(三) 元久二年五月實朝營中に五字文殊像を供養す。

〔吾妻鏡〕 十八二十五日 壬午 於營中被供養五字文殊像、導師壽福寺長老。

(四) 承元四年九月五字文殊像供養

〔吾妻鏡〕 十九二十五日 己酉 御本尊五字文殊像、更被遂供養、導師壽福寺方丈、此儀五十度可被行之由有御願

(五) 建曆元年十月永福寺宋版一切經供養あり。

〔吾妻鏡〕 十九十九日 丁酉 午尅於永福寺被供養宋本一切經五千餘卷、曼茶羅供大阿闍梨葉上房律師榮西、讚衆三拾口、題名僧百口也。

(六) 同十二月實朝の持佛堂に文殊供養あり。

〔吾妻鏡〕 十九二十五日酉癸於御持佛堂、有例文殊供養、導師葉上房律師榮西也、廣元朝臣取布施。

(七) 同十二月榮西將軍家明年の厄を祈禳す。

〔吾妻鏡〕 十九二十八日午丙將軍家明年依相當太一定御厄、今日被行御祈等、葉上房律師榮西、定宣

法橋隆宣等奉仕之。

(八) 建保二年二月四日實朝病む。榮西加持に參る。

〔吾妻鏡〕 廿二月四日巳亥晴將軍家聊御病惱、諸人奔馳、但無殊御事、是去夜御淵醉餘氣歟、爰葉

上僧正候御加持之處。略下

(九) 同二年六月榮西祈雨。

〔吾妻鏡〕 廿二月三日丙申諸國愁炎旱仍將軍家嘔葉上僧正爲祈雨、持八戒讀法華經給、相州已下鎌

倉中緇素降貴賤讀誦心經、一心潔信而被致精勤之誠也、五日戊戌廿雨。々々云

確實なる史料に依れば先づ如此歟。更に參考の爲に榮西の密教に關する傳説を左に録すべし。

(イ) 榮西宋國良超より求聞持法を受く。

〔佛說如意虛空藏菩薩陀羅尼經〕奥書

建保五年丁丑六月八日大宋國大龍寺沙門良超弟子善覺法師持來此經、流布我朝、彼善覺云、日本

榮西僧正受[○]求[○]聞[○]持[○]法[○]於[○]良[○]超[○]得[○]大[○]悉[○]地[○]矣、千時文永十年^{西癸}九月十三日、願主下總國千葉庄堀籠住人沙門道忍、奉彫此經、施法輪寺、祈二世三有矣、

(ロ) 金剛三昧院の密法

〔野山名靈集〕

四 諸宗の高僧
御登山の事

禪家の始祖建仁寺の千光國師榮西又は葉上僧
正といふ眞言を本宗として、天台

禪宗と兼學ありしと沙石集に見えたり。當山に住給ふ頃、鎌倉二位の禪尼願主として、金剛三昧院を建立あり、僧正を第一世として、三代將軍の菩提所たり。故に頼朝卿毎月の諱日には庭儀の曼茶羅供、實朝公の諱日には平座の曼茶羅供を修せしめらる。其後勅命に依て寶祚の長久を祈り天下の靜謐を護念する靈場たり、仍て彼一院に賜所の繪旨院宣御教書に載らるゝ所の寄附の都邑總じて拾萬餘石なり、其繪旨御教書等六卷
として彼寺にあり修學の僧衆も三千人に及ぶといふ。

○事實信すべからざるかごありと雖も參考の爲暫く此に收む。

上に榮西が密教に關する撰述並に修法の事跡を擧げたれば、進んで、其の思想の源流を訪ぬべし。「法華入眞言門訣」と「菩提心論口訣」とは共に、純然たる台密僧としての製作なれど、聊か前者につきて、其の内容を略述せむ。抑榮西の台密に於ける系統は前出の「天台大血脈圖」に見ゆるが如くなるが、かれは煩しきを以て、更に大系を圖し、併せて、其の始めたる葉上流の血脈を出せば左の如し。



榮朝 榮宋 琛海
殿琳 圓琳 聖諷 慈胤
(味阿流)
忠濟

日本佛法中興願文元久元年甲子初夏二十二日榮西記の中に、「今案灌頂血脈符云、日本國六十六州、小比丘東西門徒、

散在及二千人、乃至孫業一萬歟」とあるを見れば、葉上の一流も亦甚だ盛なりしもの如し。要之、榮西の一流は谷流より出でたる穴太流より更に分出したるを知る。

建仁寺に、榮西の眞筆として傳へらるる、「眞言門訣」の序文あり。云く。

法華經入「眞言門」序顯密兼學

夫以實相高廣經雙如以成諦實成深遠顯重圓而表常十界互具之稱馳言斷術三身無作之談遊心心城境允哉此言畢干變化如去出於三重之首等流人天アズカルコトハ預八相之化趣但弘中臺教心亦談自性體因茲一乘法華慄聲二十八品有助聊宣秘密奧旨知經本源決說文義大都顯佛素懷矣干時治承二年戊戌歲初冬望日

謹叙

と。余が有する寫本は此文なく題號の次に涌出品とありて、此品よりの口決を示し、順次勸發品に

至り、終に法華一部の問答あり。其の大綱を知るたよりとなるを以て左に抄録せん。

問有人云、迹門胎藏義、本門金剛義云々眞言等宗許之否。

答偏執放之、和融許之。先放義云、若以胎藏爲迹門者、迹門中不明無作三身、胎藏意三部四重三大會、併本有常住法身、從因向果、從本垂迹、舒歛自在、曼荼羅境界也、遙異。又以金剛界爲本門者、本門中明無爲常住無作三身、言語道斷、金剛界中、說五相成身、明羯磨常身、從因向果、從本垂迹、舒歛自在、智法身境遇也、故遙異也、許義云、本迹雖異、不思議一也、故譬理智冥合兩部意尤宜歎。若不兩界冥合人不是非此義、努々有犯三昧耶矣。云々

問法華經向何方說耶。又住何印說耶。

答軌云、建立曼荼羅向西見、或云、向西或云、向東、但今四方隨分可得意。初發心住功德說向西、三世常住涅槃說向南、住行向地纒行說向北、圓實菩提說向東、其文義自炳然也。智者可思之。但法華說發心間放向西之義可也、謂普賢勸發是也。有口事後可入之。住釋迦鉢印說也、問爲說實相印々何不住此印。住餘印說耶。若實相印者、自性身印也。今變化釋迦印云也。但入眞高門、行此法華法、大日如來結彼實相印說意得無失可同之。

問初大日所說、釋迦所說、有二法華、何等耶。

答大日經中有五種三味道、并四種法身所說也。若佛三味道自性身所說、若菩薩三味道受用身說、

聲聞緣覺兩三味道變化身說、人天三味道等流身說、又變化身說也、然今法華經中梵本有兩種、一鐵塔等中梵本、二多羅葉梵本、兩本互勘合、依文淺深分二佛說、今雖不誠文見之、依師傳儀軌與經、檢大日說釋迦說互入交故、智者得意取文義、可分二佛說也。余又以此義、己上口決注之。入眞言門、法華文無非陀羅尼妙句出顯教宗如天台所立文義依之大日說唯此法華非也、釋迦說唯是法華經也。然云、不得宗大綱如此非四教五時用此是眞言宗理事俱密金剛乘義也。故永異彼云々問今法華法行時以羯印爲根本耶。

答如先說實相印也。

問如此宣祕義似胸臆說何。

答是且師傳、且有證據、且自案也、并無失。謂者婆眼前毒草皆變藥草、釋摩男掌內瓦礫悉成金寶也。眞言宗深解阿闍梨之三密觀前、兒女戲咲邪魔言說、無非眞言也、何況一乘實相變化妙來所說耶。依之不憚視聽、口決注之。所祕惜亦多之、面可尋之。若深智人見此口決、永忘執着之心、一切事思有本源、且藏心箱底、非入室弟子器量人者、不可披露、努々異矣。

魯魚焉馬少からざるが如きも、略解讀せらる。思ふに、法華本門十四品の口決にして、これ亦當代の思想なるべし。

基好は伯耆大山の僧にして、榮西は備中吉備津の人也。伯耆は其比台密の盛んなりしところ也。

榮西の作と稱する「眞禪融心義」は「日本禪林撰述書目」に疑ふところなれば、金剛三昧院を論ずる時に述ぶべし。「書目」に云く。

眞禪融心義、古來傳爲光祖作、按所引密義據高野流、可疑一也、跋語云弘長三年云々、此與祖師入定相距四十八年、故知他師作、盍祖師門徒作也。

夫れ或は然らん。

此の外、密教に關する著述は余の寡聞なる未だ見ざる所也。地藏の決、「地不決」等は存せりや否やを知らず。況んや、「甚多不盡記」と稱せらるゝ密部の典籍をや。博雅諸賢の示教を待たざるを得ず。然るに、元來密教には關係なきも、「喫茶養生記」上下二卷ありて榮西の眞撰と傳ふ。之に流布本と壽福寺本とありて、製作の年代を異にし、且又文章も異なる處少からず。流布本の卷首には、

干時建保二甲戌春正月日謹叙

とありて、建保二年の撰なるを示せど、壽福寺本には

干時承元五年 辛未歲 春正月一日謹叙

とありて、甚しく異なれり。下卷は桑の事を説くを以て、桑經と稱せられしと見え、「庶軒日録」文明十八

年三月十五日に桑經を人に貸與せしことを記して「是乃昔建仁開山之所製也」といへるを見れば、其の頃流布せしを知るべき歟、建保二年二月四日實朝宿醉の氣味にて病惱ありし時、茶を進め、茶徳を譽めた

る書一卷を献せしこと、前出の「吾妻鏡」に見ゆ。而して「去月正月之頃坐餘暇、書出此抄之由申之」とあるは流布本の製作年時に合す。現に傳はるものは恐らく眞撰と見て差支なかるべし。

其の内容は榮西在唐之時聞傳へたる喫茶養生の法を記せるものにして、苦味を以て心臓を養ひ、保命覺睡の媒となさんが爲に、茶の種類、製法、用法等を説けり。上卷は五臓和合門。下卷は遣除鬼魅門と題し、上卷を一茶名字、二茶樹形華葉形、三茶功能、四採茶時節、五採茶様、六調茶様の六項に分ち、下卷を一飲水病二、中風手足不從心病、三不食病、四瘡病、五脚氣病、並に桑術法、桑煎法、服桑木法、含桑木法、桑木枕法、服桑葉法、服案椹法、服高良薑法、喫茶法、服五香煎法に分ち養生法を記せり。

奥に曰く、上末世養生法聊得感念記錄畢略中若不審之輩到大國詢問無隱歟、今爲利生謹錄上後時可改矣と。以て製作の由來を知るべし。

此の書上卷に尊勝陀羅尼破地獄祕抄及び五藏曼茶羅軌抄を引き、下卷に大元帥大將儀軌祕抄を用せり。上卷に云く。

第一五臓和合門者、尊勝陀羅尼破地獄法祕抄云、一肝臓好酸味、二肺臓好辛味、三心臓好苦味、四脾臓好甘味、五腎臓好鹹味、又以五臓充五行、木火土 金水也又充五方東西南 北中也といひ、之を方位、五體、五色等に配して云く。

肝東也春也木也青也魂也眼也

肺西也秋也金也白也魄也鼻也

心南也夏也火也赤也神也舌也

脾中也四季末也土也黃也志也心也

腎北也冬也水也黑也髓想也耳也

而して、五臓の意味不同にして、好味多く入る時は其臓強く、傍臓を尅して病を生ず。而して苦味を缺く時は、之を好む心臓は恒に弱し。然るに大國は茶を喫するが故に心臓強く長命也。我國人亦之に倣ふべしとて、五臓曼荼羅儀軌抄を引用して云く。

肝東方阿闍佛也又藥師佛也、金剛部也、卽結獨鈷印、誦○字真言、加持肝臓、永無病也。

心南寶生佛也、虚空藏也、卽寶部也、卽結八寶形印、誦○字真言、加持心臓、則無病也。

肺西方無量壽佛也、觀音也、卽蓮華部也、卽結八葉印、誦○字真言、加持肺臓、則無病也。

腎北方釋迦牟尼佛也、彌勒也、則羯磨部也、卽結羯磨印、誦○字真言、加持腎臓、則無病也。

脾中央大日如來也、般若菩薩也、佛部也、卽結五鈷印、誦○字真言、加持脾臓、則無病也。

此五部加持則内之治方也、五味養生則外療法也、内外相資保身命也。

かく、加持の效驗を信じ密法を尊重し、「此五部加持則内之治方也」といひ、内外相資保身命也と

いふが如きは、其の思想の那邊にあるかを察するに餘りあらん。

下卷に、病來の病相を説しに當り、近歲以來之病相即是也として祕抄を引用せり。云く、

第二遣除鬼魅門者、大元帥大將儀軌祕抄曰、末世人壽百歲、時四衆多犯威儀、不順佛教之時、國

上荒亂、百姓亡喪、干時有鬼魅魍魎亂國土惱人民、致種々之病、無治術醫明、無知藥方、無濟長

病疲極無能救著、爾時持此大元帥大將心呪念誦者、鬼魅退散衆病忽然除愈、行者深住此觀門、

修此法者、少加功力、以除病復此病祈三寶無其驗、則人輕佛法不信、臨終之時、大將還念本誓、

致佛法之效驗、除此病、還興佛法、加神驗、乃至得果證。略抄

榮西が傳禪後と雖も、密法を尊重せしこと、之によりて明かにせられたりと信ず。

榮西の門下に關しては諸種の脈譜ありて詳也。就中、行勇、榮朝、明全尤も顯る、明全は道元と

共に入宋して、彼地に寂す。

〔佛祖宗派綱要〕 黃龍派

天童虛懷敵

建仁開山榮西

長樂開山榮朝

建仁六世嚴琳

建仁四世玄珍

建仁五世 禪興

建仁二世 禪慶

建仁三世 道聖

建仁七世 圓琳

淨妙開山退耕 行勇

〔本朝禪林宗派并五山十刹〕和學講談所本 黃龍宗林際十六世自惠南分。

天童虛懷徹 — 建仁開山明榮西千光祖師

長樂開山榮朝

淨妙開山退耕 行勇

八坂天源祐 — 建仁八世濟翁證救 — 法觀月救圓

〔扶五山記〕四、山城州東山建仁禪寺 住持位次

第二禪慶和上、禪陽房、嗣葉上、行勇單座、建仁住持、鑑載此名、恐誤歟

第三道聖和上、三諦房、嗣葉上、

第四玄珍和上、嗣葉上、

鎌倉時代の禪宗諸派と密教

第五禪興和上、嗣葉上、

第六嚴琳和上、蓮實房、嗣葉上、

第七圓琳和上、一葉坊、嗣葉上、

第八證救和上、功德坊、嗣葉上、

號濟翁、諱證救

行勇は榮西寂後、鎌倉壽福寺にありて、其席を踵き、又政子の高野山に金剛三昧院を興して、一山を牽制するや、選れて住し、關東の勢力を代表す。榮朝は上州長樂寺にありて、一方に雄視す。其の他の諸弟は建仁、淨妙、八坂に住して各化を有縁に垂る。黃龍の一派後世落莫の趣ありと雖も、此の比は流石に多士濟々の觀あり。

榮朝は正治元年榮西に參して宗門の要旨を稟け、其の法嗣と爲る。初め密乘を修む。其の門に悲願房朗譽、圓爾辯圓を出すを以て有名也、榮西の一流たる葉上流は實に榮朝に依りて、長樂寺上州世良田密藏院尾州に行はれ、後世にその脈を傳へたり。現に密藏院、圓教寺書には葉上流の灌室を存すといふ。睿尊、覺心並に來りて必要を問ふ。貞應二年其風化の盛んなること「沙石集」に見ゆ。(沙石集六、榮朝上人之事 參照)

(備考)

〔沙石集〕

上野國世良田ノ長樂寺ノ長老、釋圓房ノ律師榮朝上人ハ略中
略上 去ル寶治元年九月二十六日入滅略中 戌ノ時ノ終リニ臨終略中 端坐シテ印
結ビ北方ニ向テ安然トシテ化セラル略下

長樂寺は徳川義季の建つるところにして承久三年さもいひ、翌年
の貞應元年さもいふ 血脈の裏書に榮朝の台密に於ける系

統を詳記す。云く。

〔長樂寺血脈裏書〕

世良田山長樂寺開山釋圓房榮朝上野國那波郡人依慈光山嚴耀別當出家、同受法汀汀者灌頂之略字、號
是台家之祕字也、號

大勸進上人、次隨建仁寺開山葉上僧正榮西、受持衣鉢並具足戒成僧、同受法汀、則穴太流也、榮西以黃

龍袈裟直付授之、今世良田山大光院在之、又奉值武藏州岡部即成房名聖
蒙再三呵責重受則蓮華院

嫡嫡相承之法、全和尚三衣並谷阿闍梨名ハ皇慶山門東塔雨谷井
坊ニ住ス今清泉院ト云所持鈴明鏡輪寶螺金罽寶冠一流聖教等

悉以付屬之、今世良田山普光菴在之。

即ち始め慈光山嚴耀に受灌、次に榮西に受灌、更に又聖蒙に受灌せる也。前出の天台大血脈圖に依れば、住奢摩印の方は禪榮、榮西、遍慶、及び聖蒙に、住智拳印の方は聖蒙、榮西、禪榮に受くるを知る。要之、山門穴太流より出でたる葉上流を承けたるものにして、前記蓮華院とは榮朝山門の住院にして、葉上流を一に蓮華流と稱す。

〔台宗學則〕上

榮西禪師ト云ハ、山門北谷ノ蓮華院ノ一代ニテ在シユエナリトゾ

此の縁を以てしかいふを知る。依是觀之、榮西の嫡流釋圓房榮朝も、一方に黃龍の宗風を舉揚すると共に、他方に金剛密乘の大阿闍梨たりしこと疑ひを容れず。かくて寶治元年九月二十六日入寂沙石集十の時に及べり。門下に朗譽(壽福寺)、榮元(長樂寺)等あり。禪宗としては黃龍の一派、台密としては、葉上の一流は、榮朝の門葉を以て中堅と爲す。左に其の略系を表して、參考に供す。



次に閑却すべからざるは退耕行勇也。行勇の傳は種々あれども、「鶴岡八幡宮寺供僧次第」に見ゆ。

一慈月坊慈蘭院

坊地者南谷ノ谷首也

供養法衆元者取勝
王經衆

聖觀音供衆二番

供料田

矢部 北深澤

行勇 莊殿坊法印
元支信

治承五年十月十六日右大將家補任帶之、周防國人、二品禪定比丘尼二位殿、爲御戒師奉剃落御髮、奉

埋置彼住坊傍、其上建立護摩堂、奉祈天下安全寶祚延長御願、依之二位家和字御書數通拜領云々

此人實四條殿御息也 永福寺大慈寺別當讓、供僧職於有俊遁世、壽福寺之入葉上僧正號千光、後補彼寺長老

第二 淨妙寺開山 高野春秋編年輯錄、新編相模國風土記、
新篇鎌倉志、紀伊國續風土記參照

政子高野山に金剛三昧院を創するや、主職と爲り鎌倉の勢力を代表す。吉野塚諍論に關する文書遺りて、高野山文書の中に在り。後鎌倉に還り、將軍頼家に親近す。凡そ幕府の法事等悉く之に與る。築西に歸するの後と雖も、修法祈禳を廢せざること、一に先師の如し。其の密教に關する思想は遺著なきを以て知る能はずと雖も、修法の事蹟は「吾妻鏡」に散見す。煩に互るを以て一々文證を擧げず。

(備考)

○建仁三年十月二十五日實朝行勇に法華經を受く。

○元久元年六月一日將軍御願愛染明王像三十三體供養、導師行勇。

○承元三年十二月十三日法華堂佛事、導師行勇。

鎌倉時代の禪宗諸派と密教

- 同四年七月八日賴家落飾、戒師行男。
- 同四年十一月二十五日將軍持佛堂供養、導師行男。
- 同五年六月十八日將軍持佛堂如意輪供養、導師行男。
- 建曆二年六月二十二日將軍持佛堂聖德太子聖靈會、導師行男。
- 同三年三月三十日將軍壽福寺御參、行男と四大師繪卷のこゝを談す。
- 同三年四月八日行男營中に參る、佛生會。
- 三年四月十七日八萬四千塔供養、導師行男。
- 建保元年十二月二十九日將軍自筆圓覺經供養、導師行男。
- 同三年正月二十五日將軍持佛堂文殊像供養、導師行男。
- 同三年十二月二十五日將軍夢想に依り佛事、導師行男。(六月五日築西寂)
- 同四年正月二十八日將軍持佛堂本尊供養、導師行男。
- 同四年八月十九日永福寺塔供養、導師行男。
- 同五年五月十二日行男所帶相論の事に依り將軍の怒に觸る、十五日將軍壽福寺に入りて慰諭す。
- 同五年五月二十五日將軍持佛堂文殊供養、導師行男。
- 同六年十二月二日大倉新堂藥師供養、導師行男。
- 同七年正月二十八日將軍(實朝)御臺所落飾、戒師行男。(正月二十七日實朝被弒)
- 承久三年正月二十七日法華堂佛事、導師行男。
- 同三年五月二十日天下無爲御祈、行男等奉仕。
- 貞應三年六月十三日義時卒夫人落飾、戒師行男。
- 貞應三年七月十一日及二十二日佛事あり、導師行男。

○嘉祿元年八月二十七日政子追薦佛事、導師行男。(七月十一日二位政子薨)

○同二年一月十一日勝長壽院塔婆供養、導師行男。

○同三年四月二十九日將軍家不例祈禱十九座、佛眼護摩行男奉仕。

○三年七月十一日丈六阿彌陀堂供養、導師行男。(政子三周忌)(文曆元年金剛三昧院に住す)

○嘉祿元年十二月二十四日將軍家不例祈禱、不動護摩行男奉仕。

○同二年正月九日將軍疱瘡沐浴、御湯加持行男僧部。

○同二年六月五日願成就院塔供養、曼荼羅供、導師行男。

○同三年十二月十三日左京兆本願山内堂宇供養、導師行男。(延應元年三月金剛三昧院より鎌倉に歸る)

○延應二年六月九日永福寺別當莊殿房僧部に祈雨せしむ。勝長壽院良信驗無きに由る。

○仁治元年十二月二十一日法華堂佛事、導師行男。(以上、吾妻鏡)

○同二年七月十五日鎌倉壽福寺に寂す、七十九。(高野春秋編年輯錄卷八)

右に依れば鶴岡八幡供僧として盛に密法を修し、歸禪の後、壽福寺の長老と爲りても、將軍御惱平癒の爲には佛眼護摩を修し、疱瘡加持の爲には、御湯加持を修し、祈雨をさへ爲しき。吾妻鏡にあらはれたる行男は全く密僧とより見えざる也。何處に禪僧の風事ありや。

(備考)

〔金剛三昧院析負記〕 第一開山長老行男莊殿房法印(中略)以行男法印可被補長老之旨、依彼執申(中略)則開山之初衆中披露、當寺者建仁寺本願僧正之素意依禪教律可有興行云々、仍每月兩度布陸日々三時之勤、寺中規式僧家法則、大概令准據于彼定置畢、但於諸堂長日之行御法並護摩、晝夜不斷陀羅尼、月別大小佛事等者、自元被始置畢(下略)

次に注意すべきは「眞禪融心義」也。前にも引用せる如く、奥に「干時弘長三年孟夏云々」の跋ありて、榮西の作にはあらざるべく、従て、行勇の作に擬する譯にも行かざるべきも、其の内容が東密と禪との一味を力説するより觀て、道範等と交渉ある葉上系の學徒の手に出でたるものなるべきは疑ひを容れず、確に榮西門葉の思想が野山一流の密教思想と接觸して産出したる作なるべし。恐らく金剛三昧院の學徒の撰なるべき歟。

「融心義」は上下二卷より成り、首に序文あり。顯教の至極は禪にして、佛教の奥旨は密也。此の眞禪二教は其の途二にして其旨一也といふが一部の趣旨とするところにして、序文中「故願教究極不如禪宗教外實際法門密教深奧無過無相灌頂實行成佛皆是唯佛與佛之境界最尊最上之法門也」といひ、「爰佛子^{某甲}雖云進恥未來後見之嘲哂退恐過去前代之明知、聊惻自宗他宗之隔心異屢注密教禪教之極理一切密教付有無相即分別四種門、禪教依教內教外又分別四門義、錄述上下二卷終書眞禪一味耳」といへり。

以て其の意の存するところを知るに足らん。

進んで、本文に入れば密教に有相無相の二門あり。詳に分てば、有相有相門、有相無相門、無相有相門、無相無相門の四門ありとて、一々に解説し、無相無相門を説きて、「此是甚深無相無相三密義理也、又是祕々極々奧々不可得之法門也、故等覺十地不能見聞之境界、外道二乘不得窺叢之義

「理也、縱又此甚深無相々々極理上假雖立有相三密名言只如幻夢之三密義理未同常途有相之三密法門者歎」とて、大師理觀之啓釋を引きて證成せり。

次に重ねて「依密教對判義理大分有二門」とて、遮情門表德門を出し、又豎差別門、橫平等門を出し、種々の名目を出して解説し、終に有相無相別説は一往の義にして、實は不二義ありと説き、「又有甚深有相無相不二義謂諸顯教以色爲事以心爲理、今眞言教色卽是心心卽色事卽理理卽事有相卽無相無相卽有相有情非情非情卽有情金剛卽胎藏胎藏卽金剛故彼竹木目底經云一切有情色法身一切有情心報身法報化因名應身三身分別有相身三體卽一無相身法報同等各不離云々」と結べり。已上上卷

下卷は禪の大意を説き、大に分てば、佛事佛事門、佛事實際門、實際佛事門、實際實際門の四門ありとし、又一を但教内門、二を教内教外門、三を教外教内門、四を但教外門と云ひ、一々に解説し、「百丈の都莫思量、壇經の身是菩提樹云々の偈を引き、實際佛事門を説きて、「此文意大同彼密宗無相有相門文所引、凡諸所有舉手動足皆成密印所有言語便成眞言所有心念自成定慧萬德自嚴云義者也」といひ、次に實際々々門を説き、圓覺經を引き、「又同經文云、始知衆生本來成佛生死涅槃猶如昨夢云々、此文意大同彼密宗無相々々門文所引我覺本不生者謂覺自心從本以來不生卽是成佛而實無覺無成也云義者也、中略又如高野大師云迷故三界城悟故十方空本來無東西何處有南北云々は文意以同彼能禪師得法文意者也」と結び、更に進んで、禪門にも、「教内教外、佛事實際不二而二不可得之法門」

ありといひ、「其意教内外無教外々々外無教内佛事外無實際々々外無佛事色外無心々々外無色心外無動々外無心又教内本無教外々々本無教内佛事本無實際々々本無佛事色本無心々々本無色心本無動々本無心而色心共不二而二不二而不一略中此等義又同彼祕經說色心不二胎金不二事理不二而二不可得義者也」といひ、最後に真禪の一味に論及して云く。「又夫密宗極理與禪宗極理大以有通用義題者何密宗實行門中雖不談有相三密而無忘三密義理禪宗實際門中雖不受佛事一塵而無捨一心法門故其言如大師云振三密金剛密藏奧旨統一心利刀顯教極理云々是以密宗實行法門與禪宗實際地其意遙以會通者歟」といひ、瑜祇經より「我本無有言云々」の文、楞伽經より「我從得道夜至涅槃夜不說一字云々」の文證を出して、之れを證し、更に大梵天王問佛決疑經の「我有正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門不立文字教外別傳」の語及び大師の「密藏奧旨不貴得文唯在以心傳心」の語を對照し、「是故密宗無相三密實行門與禪宗教外別傳實際門義大以同云心顯露者歟」といへり。次に「問亦分別法門次位密宗與禪宗共有其相同文證耶」といひ、密より大行論の説を、禪宗より圓覺經の説を引きて答へ、終に、顯教(禪を除く)と密禪とは何れも不可思議言斷心滅の法門なるに、高下の差別ありやといふ問を設け、能説の教主と所説の法門に於いて、優劣深淺ありと答へ、禪宗は顯教中の王なるを説きて云く。次禪宗與諸教深淺勝劣者於人者全無勝劣、於法聊有淺深謂禪宗者教外別傳實際理地即爲最上乘人説之又爲大根智人説之、諸教者教内法門佛事義理或爲大乘人説之或爲小根人説之、故禪宗與諸教

者於法有其淺深者也。

即ち禪と他の顯教は能説の教主勝劣なきも、所説の法門に於て、禪は勝れりといふ意也。然るに翻て、密禪の比較に及べば、眞禪の歸一を説く著者にてありながら、尙以て、密勝禪劣の口吻をもらせり。請ふ左の一節を讀め。

先密教與顯教淺深者密教者法門一佛之所説等覺十地不能見聞之境界外道二乘不得窺窬之法門也、顯教者報應二身之所説等覺十地見聞覺知之境界外道二乘授記利益法門也故人法共有淺深勝劣

といふ謂はゆる顯教中には禪宗を含めること、前引の「禪宗與諸教……」といへるを以て察するを得べき歟。而して右の文意は台東兩密殊に東密者の常套語なるより觀、更に著者の趣意は序文にも見ゆるが如く、全く眞禪の一味を説くを目的としつゝも、偶密禪の評價に至りて、密勝禪劣の氣分を髣髴せしめたるは、想ふに著者が久薰の觀念先入主となりて、不知不覺の間に流露し來りたるもの歟。之に依れば、或は思ふ、作者は野山の住侶にして、金剛三昧院あたりより流入せし禪の氣分を受けて、眞禪一味を策せしものなるべき歟。其の眞を冠に置き、禪を第二に置きて、眞禪融心といひ、禪眞といはざるもの或は此の邊の消息をもらすものと謂ふべし。要するに、此の著は葉上一流の思想を極端に表現したるものとして、頗る注目に値するものにして、又當時に於ける時代思潮の一味を印するものといふべし。

(補)

金剛三昧院創立並に其の後の事情に就きては、金剛三昧院券書類聚の中に、之れを徴す可き文書あり。即ち左の如し。

一金剛三昧院草創子細事

堂二字 供料 行法塔二基 供料 護摩堂二字 供料 鐘樓一字 鎮守社一字 供料 行法

右高野山者十方賢聖遊居之砌八方經劫古跡之地也爰高祖遍照金剛始入大唐傳祕法於惠果終發大願投三結於本朝以降或超凡位證三地發光隨機應現之花是鮮或陪禁腋戴五智寶冠卽身成佛之月忽顯加之施利益於萬方機根顯妙用於一天下內如此瑞相不可勝計遂爲擁護王法佛法則入金剛定遙期五十六億之運轉爲利益有緣無緣亦住大誓願久累四百餘歲之星霜凡厥願者渴仰隨喜之輩同離三惡四趣之苦患值遇結緣之類共接慈尊下生之座席焉誠是五濁無双之悲願三國第一之靈囀也 (中略) 是以當院本願大蓮上人申關東二位家早建當伽藍專致關東武將之祈禱始置不退勤奉訪三代出離之資糧兼擬自身得脫之勝因草創志趣大旨如此矣。

一勸學院可爲當院管領子細事

右勸學院者三寶惠命久續龍華之三會四智法水廣流天下之四海且爲報佛祖弘恩且爲興菩薩門業此偏佛祖興法素意菩薩在定本誓也是以安置二十五之結衆傳學三十七之祕教於有心人誰不同心耶依

之於當院敷地者依與法隨喜之志寺家彰永絕之書至學人止住者住未來安泰之念衆徒出起請之狀然則一山同住擁護之誓願諸人專運勸助之忠勤先叶高祖本懷之濫觴後代諸佛大願之計略也若管領之仁住名利者弘通之願必廢退歟仍爲當院之沙汰永可致學衆之扶持耳。

一勸修院同可爲當院沙汰子細事

右佛立教相只爲修行也空滯文字學豈免數寶之譏哉故卜閑寂之地以勸昇進之行開五部之密壇安五口之行人專遂一生頓證之願念旁祈四海靜謐之榮願而世屬末代人希上達不具五緣無進道業必假四事以資依身若無同心外護之知識者豈達佛道修行之前途繇茲須扶持於當院之管領宜續薰習於來際之行業矣。

一當院庄園永不可有牢籠子細事

河州新開庄觀音堂領 同州讀良庄護摩堂領

美州大原保大日堂領 賀州虎武保南塔所領

紀州由良庄大臣家月忌領 泉州橫山庄二位家月忌領

右夫一投佛界之地永無歸俗財之儀縱雖及末代信者誰不恐乎就中當院之庄園者扶持尤廣博也或聖道僧供或遁世者供或無緣供料或非人施行惣山上止住之者諸國往來之輩以之爲資緣以之擬活計遠期慈尊三會之曉偏營隨分有緣之行所宛供物已餘三千面々依怙若闕如者各々行法定退轉焉仍永不

可退轉之由嚴重被始置之者也然而當院本領筑前國粥田庄者大蓮上人雖被諫申廣博之由二位家我且深爲訪諸人菩提且廣欲育通世無緣云々既依深誓願令寄進給畢然則永期龍華會雖不可轉變異國敵賊之警固者天下一同之大事也於爰旁以依爲便宜之地被立替河內國新開庄畢庄園雖不及本願濟物依無相違于今非人々愁訴謹案寺社舊例庄園轉變之間依正衰微至所謂當院領尾張國木津次庄代伊賀國虎武保是矣然則自今以後於當院領新開己下庄園者永止轉變相傳之時儀宜爲永代不反之寺領者矣

一以首座必可補長老職子細事

右寬元二年關東御教書云當院止住之侶之中撰器量補彼職云々爰以住侶之中撰器量仁將補首座必以首座可補長老者也夫非當院住侶者不可爲首座非首座職位者不可爲長老寺院興廢者依住持之仁競望濫訴者依不定式耳是以停止諸人之希望可全當院之管領矣

一三院住侶可令存知子細事

右內專致真言上乘之薰習外宜刷興法利生之仁儀事相教相鑿器自宗他宗極底偏住和合之心念永止鬪諍之凶害夫不和者鬪諍之基也鬪諍者法滅之源也仍好不和者早須出院中矣

一可停止三院並庄內狼藉子細事

右當院者將軍數代祈禱之地武家諸人崇重之砌也而止住僧侶者稽古鑽仰之上人戒儀謹慎之學者也

然夫或云學問或云行業若有障難旁以難途繇茲於濫吹輩者是佛法怨敵亦魔軍眷屬早可召誠也國中
狼藉武家所誠況於當院狼藉者乎然則云殺生禁斷云三院檢斷爲院家沙汰可被行罪科他人全以不可
相綺夫於狼藉者不簡權門豪家之仁不見隱不聞隱速可注進交名於武家矣

以前條々記錄如斯抑佛法者必依人法而施驗人法者又依佛法而保運然則天長地久之祕榮者敬佛歸
法之善政也諸堂薰習之法燈者遙待三會之曉衆僧鑽仰之學行者遠護萬代之運仍勸子細之狀如件

弘安四年辛巳三月二十一日

金剛三昧院事寺家任申請向後不可有相違者依鎌倉殿仰下知如件

相模守平朝臣在判

金剛三昧院は其後全く密教の道場と化し了れるが、今に行勇等の禪宗を傳へし遺物とも思はるゝ
もの二あり。其一は古寫の菩提達磨和尚住世留形内真妙用祕訣（略して達磨胎息訣といふ）一帖
（粘葉本）にして、内容は道家流の調息術を説けるものなるが、恐らく行勇門葉の手に寫されて、
此寺に遣りしなる可く、鎌倉時代の寫本なり。

其二は木製の楞嚴廻向牌にして、一對あり。何れも、表面に「楞嚴勝會廻向」と上額に横書に刻し、
下に縦二段に文句を刻し、終に「不可奇書」と刻し、裏面には、一枚は朱漆にて左の一行を書す。

金剛三昧院 建武五年戊寅孟夏初日都寺玄朝土岐上座彫之

他の一枚も亦同斷にて、彫人の名を異にするのみ。

金剛三昧院 建武五年寅孟夏初日都寺玄朝堂司公嚴彫之

上州世良田長樂寺は其後全く眞言宗と化したりきと見え、中世斯寺にて書寫したる聖教往々發見せらる。今一二の例を示せば左の如し。

震災前、東京帝國大學圖書館に、金剛界成正覺密印儀軌と題する卷子本(寫本)一卷あり。足利末の寫本なるべく、内容を檢するに、初に、金剛界成正覺密印儀軌と其の印信皇慶長宴に至る名ありありて、

次に左の記あり。

寫本云文永九年庚申十一月晦日於長樂寺首座寮書寫了以祕藏本交了

生年 四十二歲

正安三年庚子五月七日於上野州新田庄長樂寺以彼本書寫了

次に合行灌頂口決池上あり。又次に皇慶阿闍梨最極祕密合行印明ありて、左の奥書あり。

寫本云文永九年十一月上野州於長樂寺首座寮書寫了

叡山眞如藏に、大永四年の書寫に係る兩部曼荼羅私鈔一帖あり。奥書に云く。

大永四年夾鐘朔日金剛佛子幸慶書之

右此抄者東寺三寶院之祕書也。爰伊豆州三島山之造營十穀者元當流之結縁之仁後東寺爲阿闍梨

也。仍在當流仁本習普門寺令附書也。雖在當流相傳所遺又重寶也。云々後學不及他見所願也慶
廣本給寫之畢。(中略)

上野州世良田之山長樂寺於眞言院仁堪忍之砌求之定落字損字可有之候梵漢俱不審多之以余本可
有交合

醫王山不動院住侶幸慶書寫之

常陸國信太庄大谷卿東光寺

同天海藏に兩行曬次第の寫本一卷あり。卷末に左の奥書あり。

治曆四年六月二十五日依私記文並師說記之 長宴記之 云々

文曆二年大歲乙未正月四日執筆建德寺住嚴尊

文和三年甲午十一月二日於上野州世良田山長樂寺賜開山榮朝

御本令書寫之留贈後見共期佛惠矣

遍 照 金 剛 了 義

康曆三年辛酉二月十日於同寺賜 老師御本爲合法久住利益有情證大菩提如形奉書寫之畢

付 囑 沙 門 尊 譽

傳授長樂寺三部都法灌頂大阿闍梨位 遍 照 金 剛 了 義(花押)

【第二章終】(未完)

大屋先生の原稿全五章の中第三章の前半迄掲載します答でしたが頁數の都合のため次號に廻さるを得なくなりました、茲に
先生並びに會員諸兄に御詫が致します。